

長沢芦雪筆「西園雅集図」について——画題の文学的典拠との関係を中心に——

藤原 幹大（名古屋大学）

長沢芦雪（1754-1799）は長年、作品の造形や画面構成の新奇性によって、図像的伝統を克服しようとした「奇想の画家」として語られてきたため、師・円山応挙に近い温雅な画風の作品はそれほど顧みられない傾向にあった。本発表で取り上げる「西園雅集図」（愛知県・正宗寺）もその一例で、精緻な相貌表現、樹石への細かな描きこみは応挙のそれを彷彿とさせる。

こうした特徴を造形的奇想の観点から論じることが困難であったためか、本作品は個別の研究対象として扱われず、正宗寺旧障壁画群全体を考察する中で、作品解説的に言及されるに過ぎなかった。また、その際に指摘される事項も画風の観点からの考察に留まっていたため、議論は硬直化している。本発表では、画風にのみ論点を設定する先行研究に対し、画中所ける絵画表現と、画題の文学的典拠との密接な結びつきに着目することで、これまで見過ごされてきた芦雪の作画態度の特徴を明示する。その上で、一般的な芦雪の画家像である「奇想」とは異なる側面を提示したい。

本作品の画題である西園雅集は、北宋の頃、蘇軾が当代の文人たちとともに雅会を開いたという故事に由来し、米芾の作とされる「西園雅集図記」を文学的典拠として受容された。しかし、江戸時代中期から後期に描かれた同画題の作品群では、先行図像に沿って描くことが優先され、「西園雅集図記」の記述はあまり絵画に反映されない傾向にある。芦雪の弟子・長沢芦洲（1767-1847）による「西園雅集図」（丹波市立春日歴史民俗資料館）も、先行作例や他の同時代の作例と同様、景物や人物描写をはじめ、画中表現には典拠に忠実でない点が多い。

こうした作画傾向が支配的であったのに対して、芦雪本は「西園雅集図記」の記述を逐語的とも言えるレベルで絵画へと移し替えており、画中表現と文学的典拠とが強く結びつく点で、明らかに周辺画家の作例とは一線を画している。

さらに、芦雪本と芦洲本とを対照して考察すると、両者が共通の祖本に基づくことが導き出される。くわえて、共通の祖本を用いながらも、芦雪本の方が一段と典拠に忠実な点からは、芦雪が、祖本の絵画表現にみられる典拠との不一致を解消し、より文学的に忠実な図像へと発展させた可能性が浮かび上がってくる。このことは画家の漢文学的教養の高さを示すと同時に、典拠への忠実度の高さには、画題の図像的伝統から解放された、新たな図像を創出しようとする芦雪独自の制作態度が認められる。

これらを踏まえ、典拠の逐語的な絵画化を主眼に置く制作態度が、当時において異質であったことを明らかにし、それが造形的奇想と表裏をなす、芦雪の画家としての新たな側面として位置づけられることを指摘したい。